

佐藤成広・小川政弘作 「シルバーシート」

- 効果音 (駅の雑踏・発車のベル)
- 駅のアナウンス (フィルター音) 急行新宿行き、間もなく発車いたします。乗り降りはお早めにお願ひします。押し合わず、すいている乗車口からご乗車ください。急行新宿行き、扉閉まります。
- 政志政志 おい和宏、早くしろよ。
- 駅のアナウンス (フィルター音) 駆け込み乗車はおやめください。
- 効果音 (駅員の笛の音。列車のドアの閉まる音。発車音。)
- 和宏和宏 (荒い息使い) 間に合った！ おっ、あそこ空いてんじゃん。ラッキー！ 座ろうぜ。
- 政志 おい、でもシルバーシートだけ。
- 和宏 お前、そんなこと気にすんのかよ。クリスチャンぶってやだね、全く。座っちまえばこっちのもんなんだよ。な、政志、座ろうぜ。シルバーシートだって、どこの席だって同じじゃないか。年寄りが来たら席譲ってやりゃいいんだよ。
- 車掌 毎度ご乗車ありがとうございます。この電車は急行新宿行きです。次は千歳烏山に止まります。(FO)
- ナレーション この2人、同じ青春高校のバレーボール部の加藤政志と西村和宏。練習を終えて、疲れ切って帰宅する途中でした。その一人、クリスチャンの政志は、電車にシルバーシートが設けられたことについて、納得のいかないことがたくさんありましたが、かといって、シルバーシートにはどうしても座りたくありませんでした。
- 政志(モノローグ) シルバーシートなんか、お年寄りや体の不自由な人が座るところじゃないか。
- 和宏 何グズグズしてんだよ。目の前に空いている席があるのに座んないのは、きっと今日の紅白試合で手を抜いてたからなんだろう。何しろフルセットで戦ったんだもんな。疲れない方がおかしいぜ。
- 政志 分かったよ。座るよ。
- 和宏 やっぱ、それが自然な行動ってもんだよ。ルソーも言ってんじゃん。「自然に帰れ」ってさ。
- 車掌 (フィルター音) 間もなく千歳烏山に到着いたします。お降りの方は、お手回りの品をよくお確かめのうえ、順序よくお降りください。
- 和宏 あれ、ヤバいな。おばあさんが乗ってきたぞ。
- 効果音 (発車のベル)
- 駅のアナウンス (フィルター音) 急行新宿行き、発車いたします。
- 和宏 おれ、寝たふりしよう。おい、政志、早く寝た振りしないとあのおばあさんと目が合っちゃうぞ！
- ナレーション この駅で乗ってきたおばあさんは、少し左右を見回したのち、政志たちの座っているシルバーシートの前にやってきました。
- 政志(モノローグ) まずいなあ。よりによっておれたちの前に来るなんて。席譲ろうかな。でもなんか気が進まないなあ。おい和宏、和宏！ あれ、本当に寝ちまったのかな。おれも寝た振りするか。
- 車内アナウンス (フィルター音) この電車は、急行新宿行きです。次は、桜上水に止まります。この電車は、1両おきにシルバーシートが設けられています。お年寄りや身体の不自由な方には進んで席をお譲りください。

和宏(モノローグ) 政志は、まだ席譲らねえのかよ。今、放送してたじゃねえかよ。ここで席譲らねえとクリスチャンの恥だぜ。キリスト教ってのは、愛の宗教なんだろう? 「隣人を愛さなきゃダメだ」って、あれほど言ってたじゃねえかよ。おれはその点、そんなもん信じてねえから、気が楽だよな。おれはほかのやつらより自分の方がかわいいもんでね。政志、早く席譲ってやしないと、あのばあさん、かわいそうだぜ。

政志(モノローグ) 席、替わってあげようかな。おれ、クリスチャンなものな。このおばあさんを立たせておいて、おれが座ってるってのがおかしんだよな。だけどなあ。今から席譲ってあげるんじゃないなあ。なんか、周りの人に変な目で見られないかな。わざと席を譲るところを見せびらかすみたいでなあ。

ナレーション だれも、おばあさんに席を譲ってあげようとはしません。電車は次の駅に近づきました。

政志(モノローグ) やっぱ、周りの人の目なんか気にしちゃいけないんだ。人生の先輩が目の前で立っている。いろんな苦勞をしてきたおばあさんが。おれは体力があるんだ、このおばあさんより。おれなら立ってても大丈夫さ。よし、席替わってあげよう。

ナレーション 政志が、そう決心して立ち上がろうとした瞬間――。

藤田和枝 あ、そこのおばあさん、どうぞこの席にお掛けください。

ナレーション そう言ったのは、彼の斜め向かいの普通席に座っていた、一人の女子高生でした。

政志(モノローグ) あ、あの子は確か1年C組の…。

ナレーション そうです、彼女は政志と同じ青春高校の1年後輩の藤田和枝でした。

政志(モノローグ) 藤田がああやって自然に席を替わってあげられたのに、おれはどうしてできなかったんだろう。何を迷っていたんだろう。

ナレーション 彼は、和枝の澄んだひとみと、譲られた時のおばあさんのうれしそうな顔が忘れられませんでした。2日後の土曜日、練習帰りに偶然彼女を見かけた政志は、思い切って声をかけました。

政志 あ、ちょっと、君…。

和枝 え? わたし…、ですか?

政志 そう。君、藤田さんだろう? おれ、2年C組、政志政志。

和枝 知ってます。パレー、好きですから。

政志 あ、そう。照れるな。あのさ、ちょっと話があるんだけど、君、おととい、電車の中で…(FO)。

ナレーション 政志は、思い切ってあの日の出来事を話しました。シルバーシートにいやいやながら座ったこと。あのおばあさんを見ても立てなかったこと。彼女の行為を見て、恥ずかしく思ったことなど――。

和枝 あたし、別に何かえらいことしたなんてちっとも思っていないし、政志さんにそんなこと言われると困っちゃうんだけど。…それはそうと先輩はどうしてそんなにシルバーシート、イヤなんですか?

政志 イヤっていうか…。なんかさ、まるで老人向けの特別席を作ってさ、しかもひと電車の半分だけだよ。“それさえやとけばあとはいい”って感じでき。体よくお年寄りを閉じ込めてる感じじゃない。

和枝 つまり、本来は、そんな特別席を設けなくても、どの座席だって、自発的に替わってあげるべきだっていうこと?

政志 そう、そうなんだよ。特別席なんか設けたって、人の心が本当にお年寄りを大切にすることで

なきや無意味だと思ふんだ。

和枝 分かります、先輩の言うこと。でも、それにしても、おとといの先輩たちの行動は、ちょっと言ってることと違うようでしたけど？

ナレーション 政志は、見る見る顔がカーッとほてるのを感じました。こともあろうに、その数少ないお年寄り専用席に座って、立とうとしなかった自分のいやらしさを、まざまざと思い出したからです。

政志 君の言うとおりに。一言もないよ。ごめん。藤田、一つだけ聞きたいんだけど、君、どうしてあんなに自然に席を譲ってやれるんだい？ “恥ずかしい”とか、“キザだと思われやしないか”とか、考えたことはないのかい？

和枝 そんなこと考えたことないわ。というよりか、そんな自分の気持ちなんか考えてる余裕ない。うちにおばあちゃんいるの。母の母。72。母が病気がちだったんで、あたしを小さい時から、とてもかわいがって育ててくれたのね。クリスチャンで、いつも聖書の話をしてくれたの。

政志 ふうん。で、君もクリスチャンに？

和枝 ううん。縛られるのがイヤだから、「そのうちに」、なんて逃げてんだけど。——でね、そのおばあちゃんが、2年前に脳いっ血で倒れちゃったの。あたしその時、“これまでおばあちゃんからもらったものを、一生懸命看病してお返しなきや”って決心したの。三度の食事のハシの上げ下ろしから、下のせわ、そのほかどんなことでも。最初は何を言ってるのか分からなくて困ったけど、そのうちに、おばあちゃんの目の動きで、何をしてほしいのか分かるようになってきたわ。

ナレーション 政志は、淡々と話す和枝の話を、目をみはるような思いで聴き入っていました。

和枝 おばあちゃんからいつも聞いていた聖書の言葉、あんまり覚えてないけど、その中で一つだけ、「あなたのしてほしいと思うことを、あなたもそのようにしなさい」(マタイ7・12)っていうの。自分がそうしてあげる立場に立ってみて、「ああ、おばあちゃんはおわたしにも、お母さんにも、だれに対しても、この言葉のとおり生きてきたんだな」ってことが、実感として納得できたって感じ。

政志 「あなたのしてほしいことを、あなたもそのようにせよ」か。マタイ7の12だ。

ナレーション 彼にはその時、これまでは一年に1度遊びに行くだけで、普段はあまり考えたこともない新潟の祖父母のことが、急に身近に感じられてきたのでした。

政志(モノローグ) おれには、まだいるんだ、してほしいことをしてあげられる相手が。遅すぎないうちに…。そうだ、おじいちゃん おばあちゃんにまず手紙を書こう！

<完>